美しい村（一）

MILK TEA* vol.6 no.1

堀　辰雄

堀 辰雄　ほり たつお
1904-1953（明治37.12.28-昭和28.5.28）
小説家。東京生れ。東大卒。芥川竜之介・室生犀星に師事、日本的風土に近代フランスの知性を定着させ、独自の作風を造型した。作「聖家族」「風立ちぬ」「幼年時代」「菜穂子」など。

◇参照：Wikipedia、『広辞苑 第六版』（岩波書店、2008）。

※ 製作環境
・Macintosh iBook、Mac OS X 10.4.6、iText Pro '09
・ポメラ DM100、ソニー Reader PRS-T2
・ソーラーパネル GOAL ZERO NOMAD 7（ガイド10プラス）
※ 週刊ミルクティー＊PDF 形式、6インチ版。
※ この作品は青空文庫にて公開中です。著作権保護期間を経過したパブリック・ドメイン作品につき、転載・印刷・翻訳などの二次利用は自由です。
(c) Copyright this work is public domain, 2013.

＊凡例〔現代表記版〕

（　）：小書き。　〈　〉：割り注。

〔　〕：底本の編集者もしくは、しだによる注。

一、漢字、かなづかい、漢字の送り、読みは現代表記に改めました。

例、云う　↓　いう／言う

処　↓　ところ／所

有つ　↓　持つ

這入る　↓　入る

円い　↓　丸い

室《へや》　↓　部屋

大いさ　↓　大きさ

たれ　↓　だれ

週期　↓　周期

一、同音異義の一部のひらがなを、便宜、漢字に改めました。

例、いった　↓　行った／言った

きいた　↓　聞いた／効いた

一、英語読みのカタカナ語は一部、一般的な読みに改めました。
　例、ホーマー　→　ホメロス
　　プトレミー　→　プトレマイオス
　　ケプレル　→　ケプラー
一、若干の句読点を改めました。適宜、ルビや中黒や感嘆・疑問符・かぎ括弧をおぎないました。一部、改行と行頭の字下げを改めました。
一、漢数字の表記を一部、改めました。
　例、七百二戸　→　七〇二戸
　　二萬六千十一　→　二万六〇一一
一、ひらがなに傍点は、一部カタカナに改めました。
一、カタカナ漢字混用文は、ひらがな漢字混用文に改め、濁点・半濁点をおぎないました。
一、和暦にはカッコ書きで西暦をおぎないました。年次のみのばあいは単純な置き換えにとどめ、月日のわかるばあいには陰暦・陽暦の補正をおこないました。
一、和歌・俳句・短歌は、音節ごとに半角スペースで句切りました。
一、表や図版キャプションなどの組版は、便宜、改めました。
一、書名・雑誌名・映画などの作品名は『　』、論文・記事名および会話

文・強調文は「　」で示しました。

一、「今から○○年前」のような経過年数の表記や、時価金額の表記、郡域・国域など地域の帰属、法人・企業など組織の名称は、底本当時のままにしました。

一、差別的表現・好ましくない表現はそのままとしました。

美しい村

堀 辰雄

天の瀝気（こうき）の薄明（うすあかり）にやさしく会釈（えしゃく）をしようとして、
命の脈がまた新しく活溌（かっぱつ）に打っている。
こら。下界。お前はゆうべも職を曠（むなしゅ）うしなかった。
そしてけさ疲（つか）れがなおって、己（おれ）の足の下で息をしている。
もう快楽をもって己を取り巻きはじめる。

たえず最高の存在へと志ざして、
力強い決心を働かせているなあ。

ファウスト第二部

序曲

六月十日　K…村にて

御無沙汰（ごぶさた）をいたしました。今月のはじめから、ぼくは当地に滞在（たいざい）しております。前からよくぼくは、こんな初夏に、一度、この高原の村に来てみたいものだと言っていましたが、やっと今度、その宿望がかなったわけです。まだ誰（だれ）も来ていないので、淋（さび）しいことはそりゃあさびしいけれど、毎日、気持ちのよい朝夕を送っています。

しかし淋(さび)しいとは言っても、三年前でしたか、ぼくが病気をして十月ごろまでずっと一人で滞在していたことがありましたね。あのときのような山の中の秋ぐちのさびしさとはまるで違(ちが)うように思えます。あのときは籐(とう)のステッキにすがるようにして、宿屋の裏の山径(やまみち)などへ散歩に行くと、一日ごとに、そこいらを埋(うず)めている落ち葉の量が増えるいっぽうで、それらの落ち葉の間からはときどき無気味な色をした茸(きのこ)がチラリとのぞいていたり、あるいはその上をアカハラ（あの、なんだか人をバカにしたような小鳥です）なんぞがいかにも横着そうに飛びまわっているきりで、ほとんど人気(ひとけ)はないの

ですが、それでいてなんだかそこらじゅうに、人々の立ち去った跡（あと）にいつまでもただよっている一種のにおいのようなもの、――ことにその年の夏がひときわはなやかで美しかっただけ、それだけその季節の過ぎてからのなんともいえぬ侘（わ）びしさのようなものが、いわば凋落（ちょうらく）の感じのようなものが、ぼく自身が病後だったせいか、いっそうひしひしと感じられてならなかったのですが、（――もっとも西洋人はまだかなり残っていたようです。ごくまれにそんな山径で行き逢（あ）いますと、なんだか病（や）みあがりのぼくの方を胡散（うさん）くさそうに見て通りすぎましたが、それはぼくに人なつかしい思いをさせるよ

りも、かえってへんな侘(わび)しさをつのらせました……）――そんな侘しさがこの六月の高原にはまるでないことが、なによりもぼくは好きです。どんな人気のない山径を歩いていても、一草一木ことごとく生き生きとして、もうすっかり夏の用意ができ、その季節のくるのを待っているばかりだといった感じがみなぎっています。山鶯(やまうぐいす)だの、閑古鳥(かんこどり)〔カッコウ〕だのの元気よくさえずることといったら！　すこしぼくは考えごとがあるんだから黙(だま)っていてくれないかなあ、と癇癪(かんしゃく)をおこしたくなるくらいです。

西洋人はもうポツポツと来ているようですが、まだ別荘な

どはたいがい閉(とざ)されています。その閉されているのをいいことにして、それにすこし山の上のほうだと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、ぼくは気に入った恰好(かっこう)の別荘があるのを見つけると、かまわずその庭園の中へ入って行って、そこのベランダに腰(こし)をおろし、煙草(たばこ)などをふかしながら、ぼんやり二、三時間考えごとをしたりします。たとえば、木の皮葺(かわぶ)きのバンガロー、雑草の生(お)い茂(しげ)った庭、藤棚(ふじだな)（その花がいまちょうど見事に咲(さ)いています）のあるベランダ、そこから一帯に見おろせるモミや落葉松(からまつ)の林、その林の向こうに見えるアルプスの山々、そういったものを背景にして、一編(ぺん)

の小説を構想したりなんかしているんです。なかなかいい気持ちです。ただ、すこしぼんやりしていると、まだ生まれたての小さなブヨがぼくの足を襲(おそ)ったり、毛虫がぼくの帽子(ぼうし)に落ちてきたりするので閉口です。しかし、そういうものもぼくには自然のぼくに対する敵意のようなものとしては考えられません。むしろ自然がぼくに対してうるさいほどの好意を持っているような気さえします。ぼくの足もとになど、よく小さな葉っぱが海苔巻(のりまき)のように巻かれたまま落ちていますが、そのなかには芋虫(いもむし)の幼虫が包まれているんだと思うと、ちょっとゾッとします。けれども、こんな海苔巻のようなものが

夏になると、あの透明（とうめい）な翅（はね）をした蛾（が）になるのかと想像すると、なんだかかわいらしい気もしないことはありません。

どこへ行っても野バラがまだ小さな硬（かた）い白い蕾（つぼみ）をつけています。それの咲くのが待ち遠しくてなりません。これがこれから咲き乱れて、いいにおいをさせて、それからそれが散るころ、やっと避暑客（ひしょきゃく）たちが入り込（こ）んでくることでしょう。こういう夏場だけ人の集まってくる高原の、その季節に先立って花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散って行ってしまうさまざまな花（たとえばこれから咲こうとする野バラもそうだし、どこへ行っても今を盛（さか）りに咲（さ）いている

ツツジもそうですが）――そういう人馴(ひとな)れない、いかにも野生の花らしい花を、これからぼくひとりきりで思う存分に愛(あい)玩(がん)しようという気持ちは（なぜなら村の人々はいま夏場の用意にいそがしくて、そんな花なぞを見てはいられませんから）なんともいえずに爽(さわ)やかで幸福です。どうぞ、都会にいたたまれないでこんな田舎暮(いなかぐ)らしをするようなことになっているぼくを不幸だとばかりお考えなさらないでください。

あなたがたは、いつごろこちらへいらっしゃいますか？

ぼくはほとんど毎日のようにあなたの別荘の前を通ります。通りすがりにちょっとお庭へ入ってあちらこちらを歩きまわ

ることもあります。昔はあんなに草深かったのに、すっかり見ちがえるくらい、きれいな芝生になってしまいましたね。それに白い柵などをおつくりになったりして。……なんだかあなたの別荘のお庭へ入っても、まるで他の別荘の庭へ入っているような気がします。人に見つけられはしないかと、心臓がドキドキしてきてなりません。どうしてこんなふうにお変えになってしまったのか、本当におうらめしく思います。ただ、あなたとそこでよくお話したことのあるベランダだけは、そっくり昔のままですけれど……

ああ、また、ぼくはなんだか悲しそうな様子をしてしまっ

た。しかし、ぼくは本当はそんなに悲しくはないんですよ。だってぼくは、あなたがたさえ知らないような生の愉悦（ゆえつ）を、こんな山の中で人知れず味（あじ）わっているんですもの。でもいったい、いつごろあなたがたはこちらへいらっしゃるのかしら？　あなたがたとはじめて知り合いになったこの土地で、あなたがたともう見知らない人どうしのように顔を合わせたりするのは、たいへんつらいから、ぼくはあなたがたのいらっしゃる前に、この村を出発しようかと思います。どうぞその日のくるまでぼくにもここにいることを、そしてときどき誰も見ていないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことを

お許しください。

またしても、なんと悲しそうな様子をするんだ！　もう、止(よ)します。しかし、もうすこし書かせてください。でも、何を書いたものかしら？　ぼくのいま起居(ききょ)しているのはこの宿屋の奥(おく)の離(はな)れです。ごぞんじでしょう？　あそこを一人で占(せん)領(りょう)しています。縁側(えんがわ)から見上げると、ちょうど、母屋(おもや)の藤棚が真向こうに見えます。さっきもいったように、その花がいま咲き切っているんです。が、もう盛(さか)りもすぎたと見え、今日あたりは、風もないのにポタポタと散りこぼれています。その花にむらがるミツバチといったらたいしたものです。ブ

ンブンブンブン唸（うな）っています。この手紙を書きながら、ちょっと筆を休めて、何を書こうかなと思って、その藤の花を見上げながらぼんやりしていると、なんだか自分の頭の中の混乱と、そのミツバチのうなりとが、ごっちゃになって、そのブンブンいっているのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな気がしてくるくらいです。ぼくの机の上には、マダム・ド・ラファイエットの『クレーヴ公爵（こうしゃく）夫人』が読みかけのまんまページをひらいています。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ読んでいますが、そのおかげでだいぶぼくも今日このごろの自分の妙（みょう）に切迫（せっぱく）した気持ちから救われている

ような気がしています。この小説についてはあなたに一番その読後感をお書きしたいし、また黙ってもいたい。二、三年前、あなたに無理矢理（むりやり）にお読ませした、ラディゲの『舞踏会（ぶとうかい）』は、この小説をお手本にしたといわれているくらいですから、まあ、あれにたいへん似ています。しかし『舞踏会』のときは、まだあんなにこだわらずに、その本をお貸しができたけれど、そしてそれをお読みになってもあなたは何もおっしゃらなかったし、ぼくもそれについては何もお訊（き）きしなかったが、それでもある気持ちはお互（たが）いに通じ合っていたようでしたけれど、いまぼくは、あのときのようにこだわらずに、こ

の小説の読後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたって、筆をとりながら、はたしてあなたに出せるものやら、出せそうもないものやら、心の中ではためらっているのです。おそらく出さずにしまうかもしれません。……こんなことを考え出したら、もうこの手紙を書き続ける気がしなくなりました。もう筆を置きます。出すか出さないかわかりませんけれど、ともかくもさようなら。

美しい村

あるいは　小遁走曲（フーガ）

ある小高い丘（おか）の頂きにあるお天狗様（てんぐ）〔天狗岳か〕のところまで登ってみようと思って、わたしは、去年の落ち葉ですっかり地肌（じはだ）の見えないほど埋（う）まっているやや急な山径（やまみち）をガサガサと音させながらのぼって行ったが、だんだんその落ち葉の量が増していって、わたしの靴（くつ）がその中に気味悪いくらい深く

入るようになり、腐(くさ)った葉の湿(しめ)り気(け)がその靴の中までしみこんできそうに思えたので、わたしはよっぽどそのまま引っ返そうかと思った時分になって、雑木林(ぞうきばやし)の中からその見棄(みす)てられた家が不意にわたしの目の前に立ち現われたのであった。そうしてその窓がすっかり釘(くぎ)づけになっていて、その庭なんぞもすっかり荒(あ)れはて、いまにも壊(こわ)れそうな木戸がなかば開かれたままになっているのを認めると、わたしは子どもらしい好奇心(こうきしん)でいっぱいになりながらその庭の中へズカズカと入って行った。

そうしていちめんに生(お)い茂った雑草を踏(ふ)みわけて行くうち

に、この家のこうした光景は、数年前、最後にこれを見たときとそれが少しも変わっていないような気がした。が、それがわたしの奇妙な錯覚（さっかく）であることを、やがてわたしのうちに蘇（よみがえ）ってきたその頃の記憶が明瞭（めいりょう）にさせた。今はこんなにも雑草が生い茂ってほとんど周囲の雑木林と区別がつかないぐらいにまでなってしまっているこの庭も、その頃は、もっと庭らしく小綺麗（こぎれい）になっていたことを、ようやくわたしは思い出したのである。そうしてつい、いましがたのわたしの奇妙な錯覚は、その時からすでに経過してしまった数年の間、もしそれがそのままに打棄（うっちゃ）られてあったならば、おそらくはこん

なぐあいにもなっているであろうに……というわたしの感じのほうが、その当時の記憶がわたしによみがえるよりも先に、わたしに到着したからにちがいなかった。しかし、わたしのそういう性急（せっかち）な印象がかならずしも贋（にせ）ではなかったことを、まるでそれ自身裏書きでもするかのように、わたしのまわりには、この庭を一面におおうて草木が生い茂（しげ）るがままに生い茂っているのであった。

そこのベランダにはじめて立ったわたしは、錯雑（さくざつ）したモミの枝を透（す）かして、すぐ自分の眼下に、高原全帯が大きな円を描（えが）きながら、そしてここかしこに赤い屋根だの草屋根だのを

散らばらせながら、横(よこ)たわっているのを見おろすことができた。そうしてその高原の尽(つ)きるあたりから、また、他のいくつもの丘がわたしに直面しながら緩(ゆる)やかに起伏(きふく)していた。それらの丘のさらに向こうには、遠くの中央アルプスらしい山脈が青空にかすかに爪(つめ)でつけたような線を引いていた。そしてそれがわたしのキザキザな地平線をなしているのだった。

夏ごとにこの高原に来ていた数年前のこと、これとほとんどそっくりな眺望(ちょうぼう)を楽しむために、わたしはしばしば、ここからもう少し上方にあるお天狗様まで登りに来たのだけれど、そのたびごとに、この最後の家の前を通りすぎながら、そこ

に毎夏のようにいつも同じ二人の老嬢が住まっているのをなんとなく気づかわしげに見やっては、その二人暮らしにわたしはひそかに心をそそられたものだった。――だが、あれはひょっとするとわたし自身の悲しみを通してばかり見ていたせいかもしれないぞ？（と、わたしは考えるのだった。）なぜって、わたしがこの丘へ登りに来たときは、いつもわたしに何か悲しいことがあって、それを肉体の疲労と取り換えたいためだったからな。真白な名札が立って、それにはMISSのついた名字が二つ書いてあったっけ。……そう、その一方がたしかMISS SEYMOREという名前だったのをわたしは

今でも覚えている。が、もう一方のは忘れた。そうしてその老嬢たちそのものも、その一方だけは、あの銀色の毛髪をして、なんとなく子供子供した顔をしていた方だけは、今でもわたしの眼にはっきりと浮かんでくるけれど、もう一方のはどうしても思い出せない。昔から自分の気に入った型の人物にしか関心しようとしない自分の習癖が、（このごろでは、どうもそれが自分の作家としての大きな才能の欠陥のように思われてならないのだけれど、）この老嬢たちにも知らず識らずの裡に働いていたものとみえる。

……この数年間というもの、この高原、このわたしの少年

時の幸福な思い出といえばそのほとんど全部がここに結びつけられているような高原から、わたしを引き離していたわたしの孤独（こどく）な病院生活、その間におこったさまざまな出来事、忘れがたい人々との心にもない別離（べつり）、その間のわたしの完全な無為（むい）。……そして、その長いあいだ放擲（ほうてき）していたわたしの仕事をふたたび取り上げるために、一人きりにはなりたいし、そうかと言ってあんまり知らない田舎（いなか）へなぞ行ったら淋しくてしようがあるまいからと言った、例のわたしの不決断な性（しょう）分（ぶん）から、この土地ならそのすべてのものがわたしにさまざまな思い出を語ってくれるだろうし、そしていま時分ならまだ

誰にも知った人には会わないだろうしと思って、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわざわざわたしはやって来たのであった。が、数日前にこの土地へ到着してからわたしの見聞きする、あたかもわたしのそういう長い不在を具象（ぐしょう）するような、この高原におけるさまざまな思いがけない変化、それにつけても今更（いまさら）のようによみがえってくる、この土地ではじめて知り合いになったある女友達との最近の悲しい別離。……

そんな物思いにふけりながら、わたしはぼんやり煙草（たばこ）を吹かしたまま、ほとんどわたしの真正面の丘の上にそびえてい

る、西洋人が「巨人の椅子」というあだ名をつけているところの大きな岩、それだけがあらゆる風化作用から逃れて昔からそっくりそのままに残っているかに見える、どっしりとおちついた岩を、いつまでも見まもっていた。

わたしはやがてふたたび枯葉をガサガサと音させながら、山径を村のほうへと下りて行った。その山径に沿うて、落葉松などの間にちらほらと見えるいくつかのバンガローもたいがいはまだ同じようなベニガラ板を釘づけにされたままだった。ときおり人夫らがその庭の中で草むしりをしていた。彼らの中には熊手を動かしていた手を休めてわたしのほうを胡

散臭(さんくさ)そうに見送る者もあった。わたしはそういう気づまりな視線から逃れるために何度も道もないようなところへ踏(ふ)みこんだ。しかしそれは昔わたしの大好きだった水車場のほとりをめざして進んでいたわたしの方向をどうにかこうにか誤(あやま)らせないでいた。しかしそこまで出ることは出られたが、数年前までそこにゴトゴトと音立てながら回(まわ)っていた古い水車はもう跡方(あとかた)もなくなっていた。それよりももっと悲しい気持ちになってわたしの見(み)い出(だ)したのは、その水車場近くの落葉松(からまつ)を背にした一つのヴィラ〔villa、別荘〕だった。わたしのしばしば訪(おとず)れたところのそのヴィラは、数年前に最後にわたしの

見たときとはすっかりうって変わっていた。以前はただ小さな灌木(かんぼく)の茂(むぞうさ)みで無雑作(ふち)に縁どられていたその庭園は、いまは白い柵できちんと区限(くぎ)られていた。わたしはふと何故(なぜ)だかわからずにその滑(なめ)らかそうな柵をいじくろうとして手をさしのべたが、それにはちょっと触(ふ)れただけであった。そのときわたしの帽子の上になんだか雨しずくのようなものがポタリと落ちてきたから。そこでその宙に浮いた手をわたしはそのまま帽子の上に持って行った。それは小さな桜(さくら)の実であった。わたしがひょいと頭を持ち上げたとたんに、そこには、ちょうどわたしの頭上に枝(えだ)を大きく拡(ひろ)げながら、それがあんまり

高いのでかえってわたしに気づかれずにいた、それだけがわたしにとっては昔なじみの桜の老樹が見上げられた。

やがて向こうの灌木の中から、背の高い若い外国婦人が乳母車（ばぐるま）を押しながらわたしのほうへ近づいてくるのをわたしは認めた。わたしはちっともその人に見覚えがないように思った。わたしがその道ばたの大きな桜の木に身をよせて道をあけていると、乳母車の中から亜麻色（あまいろ）の毛髪をした女の子（こ）がわたしの顔を見てにっこりとした。わたしもつい釣（つ）り込まれて、にっこりとした。が、乳母車を押していたその若い母はわたしのほうへは見向きもしないで、わたしの前を通りすぎて行

った。それを見送っているうち、ふとその鋭(するど)い横顔からなんだか自分も見たことがあるらしいその女の若い娘(むすめ)だったころの面影(おもかげ)が透(す)かしのように浮かんできそうになった。

わたしはその白い柵のあるヴィラを離れた。わたしの帽子の上に不意に落ちてきた桜の実がわたしのうちに形づくり、拡(ひろ)げかけていた悲しい感情の波紋(はもん)を、いましがたの気づまりな出会(であ)いがすっかり掻(か)き乱してしまったのをいい機会にして。

わたしは村はずれの宿屋に帰ってきた。わたしがその宿屋に滞在(たいざい)するたびにいつもわたしにあてがわれる離れの一室。同じように黒ずんだ壁(かべ)、同じような窓枠(まどわく)、その古い額縁(がくぶち)の中

に入ってくる同じような庭、同じような植え込み、……ただそれらの植え込みにわたしの知っている花やわたしの知らない花がむらがり咲(さ)いているのがわたしには見馴(みな)れなかった。それはそれで、またわたしを侘(わ)びしがらせた。母屋(おもや)の藤棚(ふじだな)から、風の吹くごとにわたしのところまでその花の匂(にお)いがしてきた。その藤棚の下では村の子どもたちが輪になって遊んでいた。わたしはその子どもたちの中に昔よく遊んでやったことのある宿屋の子どもがいるのを認めた。そのうちに他(ほか)の子どもたちは去った。そしてその子どもだけがまだ地面にこごんだまま一人で何かして遊んでいた。わたしはその子の名前

を呼んだ。その子はしかし、わたしのほうを振(ふ)り向こうともしなかった。それほど自分の遊びに夢中(むちゅう)になっているように見えた。わたしがもう一度その名前を呼ぶと、やっとその子はうす汚(よご)れた顔を上げながらわたしに言った。「太郎ちゃんはどこにいるか知らないよ」――わたしはそのときはじめてその小さな子どもはわたしの呼んだ男の子の弟であるのに気がついたのだ。しかしなんという同じような顔、同じような眼差(まなざ)し、同じような声。……しばらくしてから「次郎！　次郎！」と呼びながら、一人の、ずっと大きな、見知らない男の子が庭へ入ってくるのをわたしは見た。ようやくわたしに

なついてわたしのほうへ近づいてきそうになったその小さな弟は、それを聞くと急いでその方へ駈(か)けて行ってしまった。わたしのほうでは、その大きな見知らないような男の子が、昔わたしと遊んだことのある子どもであるのをやっと認め出していた。しかし、その生意気(なまいき)ざかりの男の子は小さな弟を連れ去りながら、わたしのほうをば振り向こうともしなかった。（つづく）

底本：「風立ちぬ・美しい村」新潮文庫、新潮社
1951（昭和26）年1月25日発行
1987（昭和62）年5月20日89刷改版
1987（昭和62）年9月10日90刷
初出：「美しい村」は「序曲」「美しい村」「夏」「暗い道」の四篇より成る。
序曲：「大阪朝日新聞」（「山からの手紙」の表題で。）
1933（昭和8）年6月25日
美しい村：「改造」
1933（昭和8）年10月号
夏：「文藝春秋」
1933（昭和8）年10月号
暗い道：「週刊朝日」第25巻第13号
1934（昭和9）年3月18日号
初収単行本：「美しい村」野田書房
1934（昭和9）年4月20日
※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年5月28日、解題による。
※アルファベットは底本では、すべて斜体で組まれています。

入力：kompass
校正：染川隆俊
2004年1月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

帰って采る　→　帰って来る　【来か】
悪戯《いらずら》　→　悪戲《いたずら》　【た？】
村全帯　→　村全体　【体か】

＊次週予告

第六巻 第二号
美しい村（二） 堀 辰雄

第六巻 第二号は、
二〇一三年八月三日（土）発行予定です。
定価：１００円（税込）

PDF マガジン 週刊ミルクティー＊第六巻 第一号
美しい村（一） 堀 辰雄

発行：二〇一三年七月二七日（土）
編集：しだひろし / PoorBook G3'99
http://www33.atwiki.jp/asterisk99/
出版：*99 出版
〒994-0024 山形県天童市鎌田2丁目

アパートメント山口A－202
販売：DL-MARKET
◇巻末イラスト：石川千代松。

編集：小島秀夫